

明 暗

『街にゆかばや、街にゆかばや。』と文學的の言葉をもつて國子の心は呟いた。

『それは……………なるが故に。』と猶もその心を文章語に綴らうとした時に、また暗い道の小石に當る下駄の音がしたので、はつとして心の耳を聳^{そはた}てた、突き當りの端れの家のここまで近づいて来る足音に、いよいよ胸の鼓動を高めて行つた甲斐もなく、ひたとそれが止るべきところでないところに止つた時に、國子の心はがくりと頹^{くづ}れたやうな氣がした。どうした人か、暫くするとその足音はもと來た方へと引返して行つた。

『街にゆかばや、街にゆかばや。』とまた忙しく國子の心は繰り返した。

街に住めば、その灯と、どよみと、織るがやうに往き交ふ下駄の音とに紛れて、かうまで神経が鋭くなりはしなからうにと考へられたので、神経が丁度薄い金の延^のべ金のやうになつて、その尖端^{さき}に觸れた一寸した物音にも、直ぐにぴりりと慄えて傳はつて来るやうだ。停車場を出る甲武線の電車の音、遠くの遠くの通りを流して行く按摩^{あんま}の笛、人力車の轍^{くろま}の後^{わだち}にいつまでも吠え續ける犬の聲、かと思ふと時たま足音がこの横町に近づいて来る、確かにさうぢやないと思ひながらも、その度にどきりとするこの夜の世界には夫の足音でない足音がみんな絶えて了へばいと國子は思ふ。

二人の天使がさも重さうにもちあげてる置時計が、チクタクチクタクと國子の胸を刻んで行く。その針の先ほども間違はない規則正しさが腹だゝしい、それに、じつと耳をすまして居ると、いやに耳につくその音に、なんだか呼吸^{いき}を計られてるやうで息が苦しくなつて来る。で、唇を噛みしめて暫く息を殺して居ると、セコンドの小刻みは一頻りづうっと調子を低めて行つて、また浮きたつたやうにチクタクチクタクとすまし込んで歩いて行く。幾度試してみてもその調子があるらしい。それが心ある囁きのやうにも思へて、國子は暫くその試みに紛れて居た。

いつの間にか十一時近くなつて居る。一度極度に達して通り過ぎた空腹がまた甦^{ふきん}へつて來た。ちやぶだいの上に向ひ合つた食器が、冷え切つた藥を盛つて眞白な拭巾^{ふきん}を頂いて居る。もう今まで夫が何も喰へずに居る譯がないとは思ひながら、今は意地になつて喰べやうとはしないのである。さうでないと、今まで待つたといふことが無駄になつてしまふやうにも思へるし、さうして待通したといふことを、夫に氣の毒がらせてやらなければならぬ――。

本を読むでもない。お針をするでもない待つ間の長いこと。當り前に歸ることゝ思つたので、十分待ち、二十分待ち、それから一時間——二時間——もう途中からは、何をする氣配りもない。待つのが一つの重大な仕事である。

玄關の格子を開けると、眞暗な闇の一つの部分がすうと流れ込む。足さぐりに下駄を履いて表に出て、門の戸に手を掛けると、隣りの犬が聞耳を立てたらしく、うゝうゝと云ふ。それに聞かせる何氣ない足音にして、横町の角に立つて通りを眺める。赤十字病院の塀に添つた暗い道には、微かに一つ二つの燈が見えるだけで、暗に働く人らしいものゝ影もない。夜更けに近い風の冷たさが、脇の下を潜つて背のあたりに散れて行く。

可なり離れてゐるところの湯屋から、風の加減かで二つ淋しい拍子木が鳴つた。ふと緩い足音が聞え出したので、凝乎と目を見据ゑて居ると、やがてぶらりぶらりと蕎麥屋の出前持の提灯が見え出した。その赤い灯が、ゆらりゆらりと眞黒な人影を導いて近づいて来る。

國子はさびしく諦めて家に入った。

勢ひよく門の戸が開いた時に國子は弾かれたやうに起上つた。暗い玄關のたゞきに眼鏡光つた。その息づかひがくと國子の顔近く寄つた時に、殆ど本能的に國子は身を退つた。そしてさすがにはつとした。

茶の間の仕切りを塞いだ廻し戸がギイと引かれると、ぱつとさす光りに少し鼻白んだ夫の顔が國子をちらつと見た。

『待った?』

『……………』

國子は黙つて首を下げる。

『濟まなかったね。』

『御飯は?』とわざとかう聞く。

『濟んだ。くんちゃんは?』

『まだですの。』と言葉が改つて居る。

『さう、ぢやお腹が空いたらう、先に喰べてりやいゝに。』

その調子に、濟まなかったといふよりは、困るなあ、何故そんなことをするんだらう!といふやうな調子を含んでるのが國子には物足らない。

『もう遅いから明日にしませう。』とちやぶだいを押しやって、夫が少し手持無沙汰にまだ立つて居るのに氣がつくと、

『何處に寄つてらしつて?』と目を伏せたまゝで聞く。

『田村君とこさ。』と夫は薄笑ひしながら言つて、いきなりそこに兩足を投げ出した。

『そして淺草へ行つたんでせう?』

國子にはそれは皮肉のつもりで出た言葉であつたが、夫は如何にも無造作にぽくりと首を下げた。

『椿姫を見に行つたのさ。サラベルナールの』

國子はふと、夫の背後にパツとした光りと音響の街を見るやうな氣がした。そしてあの蕎麥屋の赤い提灯が、ぶらりぶらりと歩いて居た通りの暗い闇を再び思ひ泛べた――。

底本…「水野仙子全集」第三卷

初出…「處女」大正二年九月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年六月二十日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)